

常なる磐

つねなる いわ season II

令和 4年 3月24日(木)

その2

◇ 無形の資格

立場上、ここ数年、様々な場面で教師に話をする機会をいただく。その際、話をしながら気にかかっていることがある。話し手に視線を向けてきちんと話を聞ける教師が、思いのほか少ないことだ。

話の内容が聞き手の興味をひくものでなかったり、話し手自身の話術がなかったり、聞き手を話に引き込む力が足りなかったりと、自分に刃を向けられると片腹痛いが、それを差し引いても、見ていて気持ちのよい景色ではなく、残念にも思う。

なぜなら、「教師は、常に子供に対して話をする」。この事実があるからだ。

教師は学校で多くの場面で子どもと対峙する。担任となれば、なお場面は増える。朝の会、授業、給食指導、帰りの会、部活動指導など、教科担任制の中学校でさえこんなにある。小学校の担任ともなれば、ほとんどの場面であると言ってもよい。その中で、指導・支援・教授・指示・伝達など、教師は多くの場面で子供に語り掛ける。つまり、子供に語りかける場面が実に多いのだ。話の聞き方がよくないと教師が察すれば、子供に対して何らかの手を打つ。これはとてもよい指導で、子供の生きる力を高めさせるには、的確かつ、あるべき対応・するべき指導だ。

ところが冒頭で触れたように、自分が子供たちに指導していること、子供たちに伝えていることがやれない教師、やらない教師も、少なからずいるのである。

聞き手は、まずは「『聞いています』という気持ちの姿勢を示す」。これが大切であり、教師としてはもちろんのこと、人として備えるべき資質、礼儀であると思う。

なぜ、こんな話を綴るのかと言え、本校に勤務する教員の多くが、「あたりまえにできる」からだ。意識して「やっている」と言ってもよい。

若手に限らずベテランに至るまで。これは本校教員の持ち味であると言い切れる。

教師の持ち味は、かかわる子供たちから表出されるよき姿に形を変えるものだ。本校児童の話聞く姿がよいのは、指導者、つまり担任教師の行いと指導にある。

教師は聞き手（子供）を意識して話をするのはもちろんのこと、「話し手を意識して話を聞かなければならぬ」と思う。マスト（must）だ。

なぜなら、このことを常々子供たちに話し、指導しているからだ。

子供に指導することは、教師自身があたりまえにやれていることが大前提であり、この大前提が、免許状とは異なる子供を指導する【無形の資格】であるとも思う。

こうした【無形の資格】は、他の場面でも当てはまる。

例えば、提出物。

課題や宿題など、子供たちは「期限付きの課題」が課せられることがある。子供だけではない。社会人も同様で、もちろん教員にもあり、学校内外で「期限付きの対応」に迫られることは多々ある。

会社がそうであるように、期限がある場合の提出物については「印刷物・出版物」「報告書」など、全員分が揃わないと次に進められないものが多い。よって普通に考えれば、期限のある対応を優先するのが好ましい。つまり、「仕事の優先順位を上げる」という考え方だ。

一方で、我々が対応する期限付き案件は、「面倒くさかったり、時間をかけないことができなかったり、何度も推敲せねばならぬものであったり、承認を得なければならなかったり」するものばかり。だから、対応を優先するどころか後回しにしてしまう。これが続くと、期限を重視する感覚がなくなっていく。

目の色が変わるような大失敗でも経験すれば性根から変わるだろうが、何十年もかけて積み上げられた人格は、相当な覚悟がなければ、なかなか変わらないものだ。

さらに、期限ぎりぎりでやっと動き出し、これまたぎりぎりで間に合うことを経験すると、マイナスの経験が身体に刻み込まれる。子供の宿題も、大人の仕事も同じなのである。

『心から反省している者は、ひたすら謝り、

形だけの反省をする者は、言い訳で自分を守る。』

はたして後者に、子供たちを指導する資格はあると言えるだろうか。

話を本校の教師に戻そう。

手前味噌で申し訳ないが期限で心配したことはない。いつもきちんと全員が揃う。

【話の聞き方】も【忘れ物】も、子供を支える【道徳】に深くかかわる生き方も、子供を指導する無形の資格を有した本物の頼れる教師たちである。感謝しかない。